声

特集：農作業と野生動物の接点を求めて—平成 26 年度春季大会見学会—

「コウノトリ育む農法」を視察して

山口恭弘

農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター

Yasuhiro YAMAGUCHI

今回、初めて農作業学会に参加することになり、現地見学会が兵庫県豊岡市のコウノトリの郷公園と聞き非常に楽しみになった。鳥の研究をしている者でここを知らない人はいないと思われるくらい有名な場所と取り組みである。コウノトリは日本では 1971 年に国内個体群が絶滅してしまったが、日本最後の生息地であった豊岡において 2005 年から実施されてきた野生復帰事業は成功事例として大変有名である。その取り組みは日本鳥学会などの発表をみて知っていたが、コウノトリ育む農法については詳しいことは知らず、コウノトリ米について聞いたことがある程度であった。

当日は天候に恵まれた五月晴れの中、バスで豊岡を目指した。高速を降り円山川沿いに北上していく。典型的な中山間地で、川沿いの平地に水田を中心に耕作地があり、その向こうには山々の連なりが見られる。集落ごとだろうか、鳥獣害対策の強弱の違いが見受けられ大変興味深い。豊岡に近づき平地が広がるようになってきたとき、上空をコウノトリが飛んでいる姿を見かけた。まだ豊岡までは距離があり、このあたりで見られるとは思っていなかったので思わず見入ってしまう姿であった。野生に還ったコウノトリは数を増やし、豊岡盆地を飛び出してどんどん分布を広げているのだろうと感じさせた。

豊岡盆地に入り、水田の中や上空にばらばらとコウノトリの姿を見かけるようになってきた頃、ようやくコウノトリの郷公園に到着。平日にもかかわらず大型バスが数台停まっており、観光地として成功していることを感じさせた。コウノトリの郷公園では最初にコウノトリの野生復帰事業に

についてのビデオを見せていただき、コウノトリの取り組みについての理解が深まったところで、農業改良普及センターの岡田さんから「コウノトリ育む農法」についての説明を受けた。農繁期ということで、残念ながら「コウノトリ育む農法」を行っている現地圃場の見学はできなかったが、6 月の生きもの調査の時期や収穫期、冬期湛水田など特徴のある季節に是非訪れてみたいと思った。

「コウノトリ育む農法」はコウノトリを取り組みの中心に据えることにより、コウノトリが安全に生活できる環境の維持、繁殖や越冬が可能な十分な食物を一年を通して農地から創出することにより、そのために減農薬や無農薬、水田における特徴的な水管理などの農業体系を導入し、生物多様性の確保に努めている。そして興味深いのが地域住民や消費者、メーカーをも巻き込んだ様々なイベントが農作業の中に組み込まれていることである。農家だけの作業ではなく、地域の作業という形が確立しており、最近の「攻めの農業」に代表される収益性を重視した農業にはない別の方向性を示した新しい農業の形ではないかと感じた。ただし、これだけのイベントを毎年のように企画実行するのは大変なことと思われ、今後も継続して実行していけるのが問題となるだろうが、是非続けていってほしい取り組みである。このような取り組みとセットで有機米のよさをうまく広報することにより、全国的に販路も広がるのではないだろうか。また、農業改良普及センターでは農林水産技術総合センターと共同で実証ほ場を設置し、生物多様性と害虫発生の関係や雑草対策などさまざまな研究活動を行っており、「コウノトリ育む農法」を続けていく上で発生してくる諸問題に対応している点も評価できると感じた。

室内でのレクチャーの後、コウノトリの郷公園

の公開ケージで飼育されているコウノトリを間近で観察し、公園の前に広がる水田の中で採食し、人工巣塔で繁殖している野生のコウノトリを観察

しながら、コウノトリ育むお米でつくったおいしいおにぎりを堪能し、次の目的地へと向かった。